かわむら　ずいけん
河村瑞賢
（1618〜1699年）
豪商・土木事業家

イラスト提供：
三重県南伊勢町観光協会

「安らかに治まる」安治川を開削した豪商
河村瑞賢の偉業

「水の都」とも呼ばれる大阪は元来、淀川・大和川の土砂が堆積した低湿地であり、河川の治水は、古代からの悲願だった。江戸時代前期、幕府は大坂の治水事業に向けた調査に江戸の豪商で土木事業家の河村瑞賢を同行させる。瑞賢は工事の企画立案、および陣頭指揮を担い、安治川開削ほか多くの治水対策工事を手掛けた。その工事の一環として、堂島・堀江の町が開発される。すなわち瑞賢は、大坂を洪水から守り、港湾・物流・金融機能にも秀でた「天下の台所」へと導いた。大阪城天守閣の宮本裕次研究主幹にお話をうかがい、瑞賢の偉業、安治川の今昔を俯瞰する。

河村瑞賢が開削した安治川。（大阪市西区川口付近より西を望む）

「出船千艘、入船千艘」商都・大坂の礎を築く

施工方法を工夫し20日間で安治川を開削

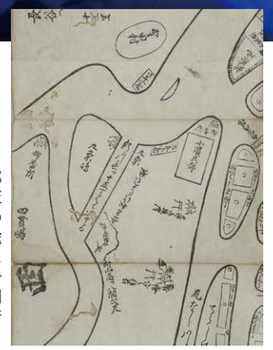
施工方法を工夫し、わずか20日間で安治川を開削したと、儒学者・政治家の新井白石（1657〜1725年）が「畿内治河記」で伝えている。

当時の淀川は、下流の九条島に当たって北西へ屈曲し、中津川（現存せず）に合流していた。九条島をはじめとする淀川下流域の新田開発や土砂堆積等により、上流部が増水し洪水が深刻化していた。瑞賢は、川の水を効率よく海へ導くため、野田村の一部と九条島を一直線に貫く「新川」（幅約90m、長さ約3㎞）の開削を提案、了承される。

瑞賢はまず、大量の木板とはしご、踏車（足踏み式の水車）を準備。九条島の中央に大きな穴を掘り、湧水を踏車でかき出す。そこから両側に河道を掘削、木板を敷いて作業用通路とした。はしごには滑り止めのスノコを張り、安全・効率化に努めた。

当時、公共工事への協力は善行と考えられ、作業員は遠近、四方から集結。技能により班分けされ、班長の統率のもとで作業を進めた。

島の両端の土を崩すと一気に河道へ水が流れ、新川が誕生した。後に幕府が、安らかに治まるよう「安治川」と命名。分割された島の南部は現在の九条界わい、北部は西九条となっている。



増補大坂図（部分。大阪城天守閣蔵）。元の川筋は大きく蛇行。瑞賢による開削工事で九条島を分割し直進する「新川」が誕生。

「畿内治河記」は、瑞賢の功績を称え「いまだこの役の重大なるごときもの、あらざるなり」と記している。

公共の利益を追求して81歳の生涯を閉じる

紀伊国屋文左衛門（1669〜1734年）に並ぶ豪商で、東廻り・西廻り航路の開拓者としても知られる瑞賢。そのプロフィールは？

元和4年（1618年）、伊勢国に生まれ、13歳で江戸に出て、荷車等をひく車力となる。品川で精霊送りの野菜が大量に流れているのを見てひらめき、漬け物に加工し販売。のち、建設現場の役人と親しくなり土木工事に携わる。明暦の江戸の大火の折には、木曽の材木を買い占め、それを売却して巨利を得た。53歳から土木家として公共事業を受注し、60代のとき安治川開削工事を手掛ける。

その後も瑞賢は堂島川の浚渫と沿岸整備、堀江川の開削等を精力的にこなして江戸へ帰り、81歳で病没する。

当初は、単に公共事業を請け負う立場であったが、公共の利益を第一目標として事業を立案する立場へ自らを変革した。晚年、武士の地位も獲得する。ゆえに、後世までその功績や美徳が伝えられ、敬愛されている。

没後、安治川両岸には出船・入船がひしめき、「天下の貨七分は浪華にあり、浪華の貨七分は船中にあり」と称賛された。沿岸の川口は、大阪開港の地としてその繁栄を引き継ぎ、近代大阪の中枢となった。

三重県南伊勢町、河村瑞賢公園に立つ河村瑞賢像。
写真提供：南伊勢町観光協会

浪花百景之内 安治川橋（大阪市立図書館デジタルアーカイブ）。安治川開削後、諸国の廻船が集まり活況を極めた。

水都・大阪の未来を開いた河村瑞賢ゆかりの地

水害対策を主眼としながら、海運・舟運整備を複眼的に担った、安治川の開削工事。近世における土木工事・インフラ整備の重要性とスケールを体感させる、ゆかりの地を歩く。

1 安治川橋之碑

瑞賢が安治川を開いた後、幕府は周辺の新地開発（町づくり）を行い、安治川橋を架設。大型船の航行のため、これより下流に橋は設けられなかった。明治6年（1873年）、橋桁が旋回する西欧製鉄橋（通称「磁石橋」）が架けられたが、明治18年（1885年）に大洪水の被害を受け爆破・撤去される。

（右）浪花百景 安治川ばし（大阪市立図書館デジタルアーカイブ）

（下）安治川橋之碑。明治時代の「磁石橋」が描かれている。

2 旧・古川の名残

安治川東端。「古川」との分岐をしのばせる突起が川筋に残る。

完成時「新川」と呼んだ安治川に対し、元の川筋は「古川」と呼ばれるようになった。古川は点線部（A）を逆S字型に蛇行していたが、終戦後の防潮堤工事に伴い埋め立てられた。その痕跡（こんせき）が安治川東端の川筋（写真左上の突起）や町の区画に残る。安治川河口は、宮本輝の小説「泥の河」の舞台となり、小栗康平監督により映画化されている。

3 大阪開港の地・川口運上所跡・大阪電信発祥の地碑

瑞賢の安治川開削工事を契機とし、その両岸に大型船が停泊する港湾設備が築かれた。船荷は市街に近いこの地で小舟に分配され、利便性が高まった。明治に入り、安治川と木津川の分岐点「川口」が開港場となり、運上所（税関）や電信局が置かれる。大阪の近代は、瑞賢の遺産の上にスタートした。

各碑と説明板が並ぶ。

4 川口居留地跡

明治元年（1868年）、この地が外国人居留地として競売に掛けられ、洋館や西洋式街灯が連なる、文明開化のシンボルエリアとなった。木津川対岸の江之子島（えのこじま）には、洋風の大阪府庁舎（2代目）や大阪市庁舎（初代・仮庁舎）が建設され、一帯は政治・経済の中心地となる。

本田（ほんでん）小学校の筋向かいに川口基督教会がある。

5 河村瑞賢紀功碑・古川跡

（左）古川跡の碑（右）河村瑞賢紀功碑

瑞賢を顕彰する紀功碑と古川跡碑が、小さな三角公園に立つ。ここは安治川開削工事の中間地点で、古地図を見ると下流区間を前期、上流区間を後期として施工されたようだ。川筋に、つなぎ目の跡が残り、地図にも描かれているのが興味深い。紀功碑（石碑）は大正年間に建てられたもの。徳川時代の大坂城築城の折、船で運搬していた巨石が川底に沈み、後に引き上げられた「残念石」を使用しているとのこと。

6 安治川トンネル

安治川橋（1）が大洪水の影響で撤去され、対岸との往来は渡し船で行われていたが、通行量の増加に対応して昭和10年（1935年）、大型船の航行に支障のない川底トンネルの工事が始まった。あらかじめ川底に溝を掘り、トンネル躯体を沈めて土をかぶせて造る（沈埋工法）、日本初の「沈埋トンネル」として昭和19年（1944年）に完成。同52年（1977年）までは車両も通行していた。かつて安治川によって分割された九条島は、最先端のトンネルで結ばれ、今も歩行者・自転車の往来が絶えない。

（左）川底のトンネル内部
（右）北側のエレベーター。自転車も通行可。

トンネル南側建屋。
右側は閉鎖された自動車用出入口

昔は車も通行していた。

7 安治川水門

安治川水門

西大阪地域は、その地形的条件から高潮が起こりやすく、大型台風などによる高潮対策が求められた。そこで昭和45年（1970年）、安治川・尻無川・木津川の三大水門が建設される。開閉式のアーチ型水門は全国でこの3基のみで、採用理由は船の航行を阻害しないため。三大水門は今後の津波に備え、新設予定のローラーゲート式水門に機能を移行していく。アーチ型水門の勇姿を見学しておきたい。

8 波除山（瑞賢山）跡

安治川の開削工事で排出した土砂は、南岸に積み上げられ、15mほどの小山になったという。松が植えられ、沖を行く船の目印となったほか、防潮堤の役割も果たした。人々は高波を防ぐ「波除山」、または、親しみを込めて「瑞賢山」と呼んだとか。明治時代の終わりまで弁天ふ頭の近くにあったが、現在は、やや東の弁天東公園に碑が残るのみ。港湾機能は沖へと移転したが、安治川河口は瑞賢による偉業の残照を水面に映している。沖へ目を転じると、2025年日本国際博覧会（略称：大阪・関西万博）の会場となる夢洲を望むことができる。

浪花百景 下安治川随見（瑞賢）山（大阪市立図書館デジタルアーカイブ）

波除山（瑞賢山）跡

取材協力：大阪城天守閣、西大阪治水事務所